

## ダビデ王とダビデを超えるメシアへの期待

110 編は新約聖書に最もよく引用されたヘブライ語の詩歌であるが、「わが主に賜わった主の御言葉。」「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう」をどのように解釈したらよいのだろうか。以下の可能性が考えられる。1) わが主ダビデ王に主なる神(Yahweh)が与えた約束。この理解は頭書との間に矛盾はない。2) 主なる神がダビデ王を越えて（単なる「ダビデの子」を越えて）将来のメシアに与えた約束であるという解釈。この両者は、シオン伝承（エルサレム）とその担い手のデビデ王家を前提としている。この詩がダビデに遡ることができるかどうかには、歴史家は懐疑的である。そして、「わが主に賜わった主の御言葉」はダビデ以外の人が、ダビデ王について語っていることになり、頭書とも矛盾することになるが、その場合、頭書は「ダビデに寄せて」歌うという意味となる。

この問題はさておき、この世界の王（ダビデ王もその後継者たちも）を超える神存在の大切さ（王の相対化）と、王と共に神のみ旨をこの世界に伝達する祭司王「メルキゼデク」への言及は興味深い。つまり、モーセとその後のアロンによる祭司制度を超える（歴史的に遡及する）神の祝福を語りうる可能性については、ヘブライ人への手紙が気づいている。(5:4-10) また、I コリント 15:27 のような主である神のみ子とその終末論的理解にも道を開いた聖書箇所なのである。最も顕著なのはイエス自身の言葉か福音書伝承者の理解か判然としないが、イエスは「ダビデ」以上のお方、政治的「ダビデの子」ではなく、「神の子」であるという解釈である。(マタイ 10:47、11:10、特に、12:35-37) 以上の展開を含めて、主なる神がこの世界を統治されている恵みを黙想してみよう。

### 1. 「わが主に賜わった主の御言葉」（1 節前半）

Yahweh ladōnī (ヤハウエが私の主人に)nə'um(名詞 言われたこと、言葉) 啓示は言葉にとって伝達される。

### 2. その内容（1 節後半）

「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」主なる神から任職された地上の王は天上の神の右に座る。「私（主なる神）はあなたの諸々の敵をあなたが足で踏みつける足台とするであろう、或いは、その時まで。」

### 3. シオン伝承（2 節）

「主はあなたの力ある杖をシオンから伸ばされる。敵のただ中で支配せよ。」シオンからあなたの力の杖を送るであろう。」は文脈上「杖」よりは「笏」が良いか？ NRSV は The Lord sends out from Zion your mighty scepter, KJV は rod=杖、口語訳「つえ」。「敵」は 1 節における「敵」と同じ言葉、複数形、諸々の敵、しかも「あなたの諸々の敵」。対立する諸力に囲まれていたダビデやイスラエルの現状を考えよう。その中でシオンに君臨する王の支配を主なる神自身が支えるという宣言あるいは約束である。

#### 4. 王の来臨の美しさと神の民の喜び (3 節)

神から委託された統治を行う王が「聖なる神の輝きを帯びて力を示すとき、神の民は喜んで迎える。直訳「あなたの民は、あなたの力の日に、聖なる諸々の美しさを喜ぶであろう。」直訳「夜明けの胎から、あなたの若さの滴りが (降るとき)」。こうして、王の来臨の美しさ、若さの滴りを礼拝共同体に集まる民は喜ぶ。神と王の臨在の「美しさ」「瑞々しさ」を黙想してみよう。

#### 5. メルキゼデク (義の王の謂) を受け継ぐ大祭司王 (4 節)

バプテストは歴史的に「政教分離原則」を確立したが、ヘブライ語聖書には政教分離というか王制に賛同しない預言者たちの伝統と、神の箱のエルサレム入場をエボデをつけて踊り、政治に宗教を利用したダビデとその王朝の 2 つの流れがある。ここでは、メシヤ的王を「あなたはどこしえの祭司メルキゼデク (私の正しい王)。」(である)と主なる神が「誓い」、「改めることのない、嘆き、後悔することのない言葉によって立てた (完了形) と言われており、後にヘブライ人への手紙の神学的枠組みとして用いられるようになった。

#### 6. 主なる神が裁かれる (5-6 節)

主なる神は、メシヤ王の右手に立たれて、彼を助け、怒りの日に諸王を撃たれるであろう。主は諸国を裁き、頭となる者を撃ち (傷つけ)、広大な地(多くの国々の上)をしかばねで覆われる(満たすであろう)。あくまでも主なる神がなさるのであり、王が自分の力で行うのではない。この差を認識することで、暴力的権力による支配を神の名によって正当化すること (様々な「王権神授説」) を避けるべきである。

#### 7. 王の勝利 (7 節)

「彼はその道にあって、大河から水を飲み、頭を高く上げる。」

「水」という言葉は原語にはないが、水はいのち、生活、行軍にとっては不可欠なものである。王は大きな河から飲み、へこたれず、うなだれず、頭を上げるであろう。

主なる神が共にいますことは王だけではなく、民にとっても、私たち、現代に生きる信仰者にとっても力強いことである。しかし、畏れるべきことでもある。神は私の力も徹底的に相対化するのだから。